

神奈川県立歴史博物館蔵 一遍上人像の画讃をめぐって

津田 徹 英

神奈川県立歴史博物館が所蔵する一遍上人像（紙本墨描淡彩、本紙縦六二・二cm、横三一・六cm、挿図1^①）は、小画面ながら時衆の祖・一遍智真（一二三九〜八九）の姿を描いた中世に遡る数少ない画像として知られている。その容貌は、やや前屈みにあらわされ、白色系の膝までの襯衣（もしくは腰以下にまとう裙）を着用し、薄墨色の衣を着け、その上に柿渋に近い褐色の上着を着用する。この褐色の上着には濃い墨色の幅の狭い衿をとまなっており、時衆の中世に遡る「阿弥衣」の現存遺例が同様の衿をとまなう仕様となっていることを思えば、やはり「阿弥衣」の着用とみなされよう。この上着のうえから腰回りにおいて墨色の細い平紐を締め、左腰付近で手巾（手拭）を結わえ垂らす。薄墨色の袈裟を左肩に担ぎ懸け、足は素足となり、右足を踏み出し、両手（後掲挿図3）は合掌しつつやや前方に差し出し、二連の数珠を懸ける。ちなみに、この二連の数珠は主珠を黒色とする一連の小輪を手前にし

て、これに褐色とする一連の大輪が交差しつつ、その親玉からは下方に向けて小さく二輪を連ね、それぞれに十個連珠をとまないながら、先端に紐房が長く垂れる。二連の数珠を懸けた両親指の付け根には短冊状の賦算の紙束を親指で挟み込み、両第二・三指先には賦算の一枚を先端が前方に向くように挟んでいる。その姿は一遍、ひいては中世における遊行上人の衆生への賦算授与のありようを具体的に示している点でも貴重であろう。

画面は余計なものを一切排して一遍の姿だけを描く。その姿かたちは現存最古の一遍の肖像彫刻として知られる神奈川・無量光寺像と同じくするところから、中世にあつては一遍の規範性を持ち得た姿かたちを再現したものとみなされよう。かの無量光寺像の像容は一遍終焉の地であった兵庫の観音堂（のちの真光寺）の敷地内に営まれた一遍廟所に安置された一遍彫像（根本像）に近いとの指摘があることを思えば、神奈川歴博本もその姿に倣うとみることも出来ようか。

その像主・一遍の容貌（挿図2）は、頂部やや後方が尖り、同じく後頭部が突き出たかたちとなり、面長な相貌には額に横皺四筋があらわれ、長い眉毛、削げた頬などをか細い描線をもって描き起こす。さらに両上瞼のライン、耳孔の下半部、鼻先に濃墨線を加え、唇に淡く朱を添え、軽く開いた口元には白い上歯が覗く。

この相貌に認めた細い描線での輪郭の描き起こしは、賦

挿図1 一遍上人像
神奈川県立歴史博物館蔵

挿図2 一遍上人像 面部
神奈川県立歴史博物館蔵

挿図3 同 両手先

算を手にした両手においても同趣であり（挿図3）、しなやかな指先を現出している。

一方、着衣ならびに両脚から足先にかけての輪郭は面部の描線よりも肥瘦をとめない、その打ち込みともども平面的であり、いささか筆致が弱く、先行する画像を写したものであったことを思わざるを得ない。ただし、上述の相貌はいまだ像主・一遍の個性をよく伝えており、そのことを勘案すると、南北朝頃（十四世紀半ば）の制作と認識されることを頷かせるものがある。

本図の制作年代をどのように確認したうえで、神奈川歴博本をここで取り上げようとする所以は、画面上方に墨書された三十一文字の和歌と六字の名号の筆跡に注意を喚起しておきたいからである。

当該の墨書を読んでおくと次の通りである（挿図4）。

佛こそいのちと／身とのあるしなれ／我ふるまいも／わかこころかは／
南無阿弥陀仏（／は折り返し）

この和歌は『一遍上人語録』巻上に収められた「京都御化益の頃、西園寺殿の御妹の准后へ進ぜらるゝ御返事のおくに」という詞書をともなうて記される「仏こそ命と身とのあるしなれ、わが我ならぬこゝろ振舞」のバリエーションと判断して大過ないであろう。

これまで、この神奈川歴博本に画讃として墨書された三十一文字の和歌とこれに添えられた六字の名号が考察の対象となり得たことは全く無かったようである。何故この和歌が選びとられ、画中に執筆されたかということ

も、神奈川歴博本の制作事情を解明してゆくうえで、ひとつの手がかりを提供して興味深い問題を提起するものと思われるが、それ以上に論者の関心が向かうのはその手跡にある。

結論を先取りするならば、『遊行上人縁起絵巻』全十巻すべてを伝える現存本のうち、最も古い十四世紀半ばをやや過ぎた頃の制作とみられる京都・金蓮寺本の巻三（上・下）の詞書の筆跡に比較的近いように考えるのである。試みに神奈川歴博本にあらわれたそれらの文字のいくつかについて、金蓮寺本の巻三（上・下）の詞書にあらわれた文字と比較を試みたのが後掲の表である。

金蓮寺本の各巻の詞書は、六条有光、三条公忠、尊円法親王ら当代の権貴栄達の士五人による「寄合書」であったことを論者は指摘している。⁹その巻三（上・下）の詞書の筆跡については、『新後撰和歌集』の断簡で「安芸切」と呼ばれる一群の古筆切と同一と断定してよい。¹⁰かの「安芸切」は、久我長通（一二八〇―一三三三）と伝承されてきたが、論者は長通息男の通相（一二三六―七二）の可能性も排除できないであろうことに及んでいる。しかも、「安芸切」を執筆した人物は、金蓮寺本の巻三（上・下）に留まらず、別の機会にも『遊行上人縁起絵巻』巻六の詞書を執筆していたことは、永青文庫ならびに金沢市立中村記念美術館が所蔵する手鑑に収められて古筆切として伝わった詞書の断簡から窺われる。¹²

金蓮寺本の巻三（上・下）の詞書の筆跡と比較的近いものを、この神奈川歴博本の上部墨書の筆跡に認められないかどうかである。なお、ここでわざわざ「比較的」と断ったことにも理由がある。

先に検討を行った金蓮寺本の巻三（上・下）と一群の「安芸切」の文字における個々の筆跡比較にあつては、両者に相違点を見つけたのが逆に困難と思わせるほどに個々の文字の筆跡は酷似しており、詞書の執筆者については「安芸切」の執筆者と同一人物であると確信をもって断言してよい。¹³これに対して神奈川歴博本の墨書は三十一文字の和歌と六字名号からなるものであり、文字数が限定される上に、金蓮寺本の巻三（上・下）の詞書にあらわれた対応する各文字の筆跡との比較にあつて、完全に同一筆跡と断定できるほどに合致するとはいずれも認め難いのも事実である。とはいってもその書き癖や文字の特徴においてあい通じるものをそこに認め

挿図4 一遍上人像 画讃 神奈川県立歴史博物館蔵

てもよさそうである。同一人物の手になる可能性を一概に排除してしまうことは出来ないように思われるのである。

仮に同一人物の手になるとみることが許されるならば、「安芸切」(『後撰和歌集』の執筆者は、絵巻『遊行上人縁起絵巻』の詞書、絵像(神奈川歴史博物館)の画讃に及んで手がけていたことになる。このように絵巻詞書、絵像の画讃という異なるメディアの制作に際して関与がなされたことについて、すぐに想起されるのは同時代にあつては真宗の覚如(親鸞の曾孫、一二七一―一三五二)、ならびに、その息男・存覚(一二九〇―一三七三)の業績をあげることができ、それはあくまで真宗という宗門内での要請にもとづくものであり、おそらく「安芸切」の執筆者は上述の通り、時衆の宗門外(枠外)にあつた貴権栄達の士とみることが適切であり、いささか事情・性格を異にするといえよう。むしろ、時衆の外護者であつた可能性とともに、要請にもとづき宗門の絵巻詞書の執筆、絵像(肖像画)の着讃に関与していたことから、時衆に対して非常に親和的な存在であつたことが浮かび上がるであろう。

「安芸切」の執筆者についてはいまだ誰であるのか明確でないうえに、はたして神奈川歴史博物館に記された画讃の筆者と同一人物の手になるとみなし得るかどうかが、確定的でなく隔靴搔痒の感は否めないが、ここでは備忘を兼ねて一文をなしておきたいと思うのである。

註

(1) 本画像の調査は、平成三十年九月六日に神奈川県立歴史博物館において、遠山元浩、高岸輝の両氏とともに、後掲の「付記」に明記した科研の一環として熟覧に及んだ際に採寸したものである。また、以下の記述もその折の知見に拠るところが大きい。

(2) 墨色の賦彩とあいまって、一遍を描いた中世に制作が遡る画像として、神奈川・清浄光寺所蔵の一遍上人像(註5の後掲書 図版115・116)においても、上着として描かれる「阿弥衣」と膝頭付近にまで及ぶ白色系の「襯衣(もしくは袈)」の中間において墨色の広袖を着込んでおり、その色味から判断してや

はり墨染の衣とみなし得るであろう。

(3) この墨色の幅の細い衿をとまなう点が「阿弥衣」の特徴であつたとみなし得ることについては、やや時代は降るが、大永二年(一五二二)の墨書銘をとまなう広島・西郷寺所蔵の阿弥衣や、元亀(一五七〇―七三)の墨書銘をとまなう神奈川・清浄光寺所蔵の阿弥衣(註5の後掲書 図版28・29)においても同様であることから窺えよう。ただし、両者は衿傍の両肩に小さな長方形の肩当てを縫い付けるのに対して、神奈川歴史博物館ではそれを描かない。

(4) 無量光寺像における様相を思えば、袈裟は大・小二本の威儀をもつて左肩に懸けるものと思われるが、神奈川歴史博物館では明確でない。

(5) 『時衆の美術と文芸 遊行聖の世界』(東京美術、一九九五年) 一一〇頁。

(6) 註5の前掲書四九頁(図版1解説)

(7) 大橋俊雄校注『一遍上人語録 付 播州法語集』(岩波書店、一九八五年) 五七頁。

(8) 拙稿「詞書の筆跡からみた金蓮寺本『遊行上人縁起絵巻』の位相」『美術研究』四二三号、東京文化財研究所、二〇一八年。

(9) 註8の拙稿。

(10) 註8の拙稿。

(11) 註8の拙稿。

(12) 註8の拙稿。

(13) 註8の拙稿。

「付記」小稿は二〇一八―二一年度科学研究費助成事業・基盤研究(B)「十四世紀を中心とする縁起・絵伝の制作組織および様式系統の総合的研究(研究代表者 高岸輝 東京大学教授)」の成果の一部である。本画像の熟覧に際しては所蔵館である神奈川県立歴史博物館のご高配をいただくとともに、同館学芸員 橋本遼太氏には貴重な時間を割いて立会いをしていただいた。なお、小稿で用いた挿図はいずれも遠山元浩氏撮影・提供のものである。ここに記して謝意を表す次第であります。

[表] 文字筆跡の比較

	県博本	金蓮寺本		県博本	金蓮寺本
そ	1	上 2-7	も	3	上 13-6
ち	1	下 1-6	る	3	上 2-7
と	1	上 1-10	ろ	4	下 2-17
な	2	上 14-17	阿	5	上 2-1
の	1	上 1-12	身	2	上 5-3
ふ	3	上 2-6	仏	5	下 2-1
ま	3	上 4-11	佛	1	上 2-18

(凡例)「県博本」は当該の神奈川県立歴史博物館本を、「金蓮寺本」は同寺所蔵『遊行上人縁起絵巻』巻三をそれぞれ意味し、「県博本」各文字下の数字は画讀の行番号を、「金蓮寺本」各文字下の二連文字は上巻・下巻の別と第何紙目かを、ハイフン後ろの数字は各紙詞書の前から数えて何行目かを示す。